



豊中市教育センター
〒560-0033 豊中市蛍池中町 3-2-1-600
TEL 06-6844-5290
FAX 06-6840-8127
平成22年(2010年)9月10日第45号

～ 間 ～

連日続く暑さの中、8月27日(金)、夏期教職員研修会を実施しました。本年度は落語家の桂かい枝さんをお招きし、参加者も350名を越える大きな会となりました。

さて、本番直前の舞台袖の様子です。着物姿のかい枝さんは、袖にある姿見を見ながら、話の構成を考えておられる様子で、時折、客層やどれぐらい入っているかなど、確かめられるその表情は真剣そのものでした。ところが、緞帳が上がると、表情豊かに、会場の人々を引き付けながら、1時間30分がとても短く感じられるような講演をされました。かい枝さんのように、聴衆の心を掴みながら話をするには、どのようなことに気をつければよいのでしょうか。

もともと落語は、複数の登場人物を一人が演じることから成り立っています。歌舞伎や能、狂言など他の古典芸能と違うところは、噺の内容をほぼすべて言葉や表情で伝えなければなりません。つまり、声の大きさや調子、身振り手振りを駆使して、場面の状況を聞き手に想像させていきます。

このとき大切にしたいポイントの一つに「間」があるのだと思います。

英語で落語を演じ、海外で活躍するかい枝さんは、雑誌の中で次のように語っておられます。

“初めの頃、落語特有の語り口をそのまま英語で演じていたら、「自信がないの？しゃべり方がゆっくりだし、主張がないね！」と言われたのです。それからというもの、大きなアクションでテンポよく、「こんなに大げさでよいのか」と思われるほど、前へ前へと自分を出して行きました。ところが、アメリカ文化で磨かれた落語をそのまま日本で演じたとき、うまくいかなかったのです。そこで、日本語の「間」をつくり出すスイッチに切り替えることを学びました。”

「間」は、相手が違えばそれぞれ異なってきます。その違いを理解して話すことで、相手の“聞きやすさ”を促すことになり、人とのコミュニケーションが豊かになっていくのではないのでしょうか。私たちも日常生活において、この話し方の「間」とユーモアの感性を持っていれば、もっとお互いに心地よく会話ができることだろうと思います。

学級経営に置き換えて考えてみます。クラスの子どもたちの生活背景は、それぞれに違っており、そのような“異なる「間」”を持つ子どもたちに話をするときには、子どもたちの表情、反応を確かめながら心を掴んでいけたらと思いました。

これまでの淡々とした話し方を改めつつ、「間」を研究するべく、次の休みの日には、繁盛亭で修業してこようと思います。(佐藤)

お知らせ

今月より、**サタデーサポート相談会**を実施します。

先生方の自主的な教材研究等の支援として、一定のテーマを設定した話題の提供とともに相談会を実施します。詳細につきましては、豊中市教育センターのHP(内向けページ)をご覧ください。

教育相談系の学校支援について

教育センター7階、教育相談係では、臨床心理士や言語聴覚士などの専門職員が毎日たくさんの保護者や子どもの相談を受けています。昨年度の相談のべ件数は10,359件、ケース数としては738ケースで過去最高となりました。今回のeひろばでは、教育相談係専門職員の多角的な学校支援の一端を紹介します！



必要に応じて・・・

来所にて

教育相談（3歳半～中学生）

- ★子どものかかわり方について保護者と相談します。（カウンセリング）
- ★子どもと1対1でかかわることで、心の安心感を育み、心の成長を促します。（カウンセリング・プレイセラピー）
- ・平日の相談では、木曜日の午後が初回の相談日となります。（連絡先：6844-5231）
- ・保護者からの予約電話が必要です。カウンセリングは基本的に守秘義務のなかで行われます。
- ・相談を継続することもありますし、他の機関を紹介することもあります。また、相談の継続ではなく、学校園と連携していくことで、保護者や子どもを支援していくこともあります。

ケースカンファレンス

- ★保護者の同意のもとにその子どもについての情報交換等を学校園などに行っています。（虐待ケースについてはこの原則外で連携します）

【内容】

- 参加者
学校園等・・・担任、支援学級担当者等
センター・・・親担当、子ども担当等
その他・・・関係機関担当者等

○会議の流れ

- 1 自己紹介 ・ 目的の確認
- 2 子どもの状況（情報交換）
- 3 子どもの関わり方
- 4 今後の対応・役割の確認
- 5 会議を終えるにあたって

- ※申し込みについては、各学校園長を通してお願いします。

訪問にて

校園内研修講師、校園内・学年会等ケース会議ファシリテーター

- ・4月から9月にかけて、20近くの学校等から講師の依頼を受けました。
 - ① より深い子ども・保護者理解のために。
 - ② 的確なアセスメント（見立て）とプランニング（支援方針をたてる）のために。
- ・研修内容として、構成的グループエンカウンターなど学級集団に関することも行っています。

※教育相談系の専門職員を入れて校内研修やケース会議を開催することをぜひお勧めします！
申し込みについては、管理職を通して6844-5292へご連絡ください。

教育相談員派遣（小学校へ）

- ・今年度より、1学期は2校、2学期は4校へ月に2回程度、教育相談系の臨床心理士を継続的に派遣しています。回数は少ないのですが、中学校のスクールカウンセラーに準じた活動となっています。
- ★継続して派遣できる学校数が限られますので、その他の学校園には、学校園の要請に応じて、専門職員が学校園を訪問して、子どもへのかかわり方について、先生方のご相談に応じています。
- ・訪問しての相談を何回か経て、校内研修会で事例検討を行った学校や、校内研修会で全体の子ども理解を図ってから訪問し個別の支援について相談した学校など、必要に応じてご活用いただいています。

教育相談研修、大好評！

学校園内での研修以外に、毎年、教育相談研修を開催しています。本年度も4回開催し、どの講座も好評でした。紙面では第3回、第4回のエッセンスについて、一部紹介します。

第3回 「教育相談の基礎」～受け入れ感を育むコミュニケーション術～ より

講師：臨床心理士 松波 朝子

<心のものさし>

- ・心の状態を把握し、段階に応じたかかわりを目指す（下表。ただし、3段階は紙面の関係上、主なステップのみ掲載）
- ・相手の言動と自分自身の感覚から、仮説をたて、検証しながらかかわっていく

積極的にほめる肯定的なかかわりが何より大切！



	子どものようす	状態	かかわり方
段階3 ↑	うまくいなくても、自分で悩んだり、がんばったり、適切にSOSが出せる。	・安心感をもとに旅立ち ＝集団で学べる状態	手は離して、見守る SOSを受け止め、ともに解決策を考える。
段階2 ↑	不安はありながらも、興味のあることは、やってみようとする。	・安心感をもとに冒険 ＝集団で学ぶための準備	安全地帯の役目を担う。見守っているとのメッセージを伝えつつ、好奇心に共感していく。（冒険へのチャレンジに寄り添う）
段階1	「こわい」「不安」「わからない」ことで、混乱し、どうしたらよいかかわからず、泣いてしまう。	・安心感がない ＝個別で二者関係充実期	子どもの気持ちを受け止め、大人にSOSを出したら、大丈夫という実感をもたせる。



第4回 「気になる子どもの見立てとその支援」 より

講師：臨床心理士 村田 絵美子

<アセスメントから支援へ>

- ① 子どもの様子から、その行動の背景に何があるか考える
 - ② 何が得意で何が苦手か等、さまざまな視点での情報を整理してみる
- 安心感を育てる関わりを通して、保護者と協力しながら、背景に応じた具体的な支援に取り組む。

具体的な支援の手がかりは・・・

ぜひご活用を！

この表紙でオレンジ色の冊子が、昨年度、各学校園に配布されています。気になる子どもへの支援のヒントが満載ですので、ぜひご一読ください。

生活面

- ・整理整頓できる？
- ・忘れ物は？
- ・身辺自立は？ 他

知的面

- ・学習の理解は？（算数・漢字・作文など）

養育環境

- ・保護者との協力関係は？

認知面

- ・見たものを理解・記憶しやすい？
- ・聞いたことを理解・記憶しやすい？
- ・必要なことに注意をはらえる？
- ・見通しをもつことができる？

ことば・対人関係

- ・人を思いやる力はある？
- ・先生や友だちとどんな関わり方をしている？
- ・状況を読んで理解できる？

気持ちの発達面

- ・気持ちをコントロールする力や我慢する力は？
- ・チャレンジする意欲、好奇心は？
- ・どのような自己イメージをもっている？

運動面

- ・姿勢を保つ力は？
- ・全身運動の力は？
- ・手先の器用さは？

音の聞き分けとことば

前号で、発音について取り上げましたが、今回は「音の聞き分け」がどのように「ことば」に関係しているのかについて、お話したいと思います。

きれいな発音をするためには息の使い方や唇、舌、あごの動きなどが必要ですが、正しく音を聞き分ける耳の力も大切になります。耳には単に音を聞くだけでなく、いろいろと不思議な機能が備わっています。年齢によって聞き分けられる音の種類が変化したり、雑多な音の中から自分に必要な音だけを聞き分けたりする機能です。例えば、最近ニュースになったモスキート音(蚊の羽音)などは若い人にだけ聞き分けられる音ですし、高齢になると高い音が聞き分けにくくなります。一般に、就学時期にはほとんどの音を聞き分けることができるようになっていわれています。

*乳幼児期は低い周波数の音が聞き分けやすいといわれます。

(低周波数の音)・・・マミムメモ、バビブベボ、ダヂヅデド、
ナニヌネノ、ン、ウ、エなど

*就学時期の子どもは高い周波数の音でも聞き分けられます。

(高周波数の音)・・・サシスセソ、タチツテト、カキクケコなど

このことから考えると、3歳の子どもが「さかな」を「ちゃかな」とか「たかな」と言い間違えていても、まだ音の聞き分けができないので仕方がないと言えます。しかし、7歳の子どもが「せんせい」を「てんてい」とか「ちえんちえい」と言い間違えていたら少し気に留めてみてください。



前号で取り上げたように、発音には獲得時期の目安(例えば、カ行なら3～4歳、サ行なら5～6歳、ラ行なら4～6歳)があります。音を聞き分けられる年齢の目安もほぼ同じです。ことばの理解力には心配がないのに獲得時期を過ぎても発音があいまいな時は、舌や唇の動き、耳の力などが影響していることがあるので、先生お一人で悩まずに、ことばの教室や教育センター、耳鼻科などへご相談ください。(迫)